

# プロジェクト型教育と地域伝統産業振興のためのワークショップ・プログラム

## The Workshop-program for the External Federated Education and Promotion for the Regional Traditional Crafts

美術学科・デザイン学科・写真映像学科

佐藤 佳代・井上 友子・青木 幹太・星野 浩司・荒巻 大樹

Kayo Sato / Tomoko Inoue / Kanta Aoki / Koshi Hoshino / Daiki Aramaki

### 1 はじめに

九州産業大学では近年、プロジェクト型教育「KSUプロジェクト」を推進している。芸術学部では2008年度より芸術学部3学科（美術、デザイン、写真映像学科）を横断した産学連携コラボレーション活動「博多織プロモーション計画」を実施し、2012年度より対象地域や産業が広がりを続けていることからプロジェクト名称を「地域産業プロモーション」と変更し継続している。

これまでの実践的な活動により、こうした産学連携コラボレーションが、プロジェクト型教育として人材育成や汎用的能力の向上に有効であることを確認した<sup>(註1)</sup>。本論では2012年度の具体的なワークショップ活動事例を通して、「ワークショップ・プログラム」において同様の効果を得る可能性を考察するものである。

### 2 プロジェクトの背景

2008～2011年度は、博多織産業に注目し、「博多織プロモーション計画」を4年間継続した。各学科の専門性を活かした商品開発や生活提案、博多織をモチーフとしたオブジェやアート作品への展開、博多織の歴史調査、映像・画像媒体によるアーカイブスなどを行ってきた。活動年数の経過と共に、帯やバッグ等商品化され市場に流通する事例が増え、地域の伝統産業を振興するための活動に一定の成果が得られている。

博多織産業は、昭和50年代をピークにその後は生産高・売上ともに減少傾向にある。博多織は福岡県の経済産業大臣が指定する250品目の伝統的工芸品のうちの福岡県指定の7品目に含まれており、2011年には着尺や袴地も追加認定されたが、

産業振興復活のための起爆剤とはなり得ていない。参加している学生を対象としたアンケートでも、博多織を知らなかったという割合が60%を超えていた<sup>(註2)</sup>。学生は一般消費者の意識に近い存在であると考えられることから、博多織の周知、経験や体験による情報伝達は急務であると推察できる。大学との産学連携コラボレーションに対しては、博多織を用いた商品開発等以外にも、伝統産業のすそ野を広げる情報発信の必要性や期待が高まっている。我々は、博多織産業を体感し、博多



図1 2011年度「KAZARIMON」

織文化・産業への関心や認知度を高める情報発信、将来の博多織消費者の創出を目標としたワークショップ・プログラムを開発することとした。この活動に参加する学生に対し、地域産業が期待する人材育成活動、プロジェクト型教育の効果である汎用的能力の向上を目指した。

### 3 プログラムの背景

本プロモーションにおけるワークショップ・プログラム初年度である2011年度は、美術学科プロジェクトチームが博多織などの地域伝統工芸のアート作品とともに伝統的工芸品の生地でアクセサリーを製作するワークショップ「KAZARIMON」を企画、最終展示会場の商業施設で2日間にわたり実施した(図1)。このワークショップ・プログラムは、協力企業から提供された博多織・久留米絣の生地を用いたことから、手触り、品質などを広く周知することができた。しかし随時参加型のワークショップであったため、伝統的工芸品の定義や産業の歴史、素材や生地の制作過程などの情報を、参加者全員に同じ濃度で伝えることができていなかったため、2012年度ワークショップ・プログラム企画に際しては①参加者全てに情報を行きわたらせる、②対象者を絞る、③回数を重ね情報濃度を高くすることを改善点とした(図2)。

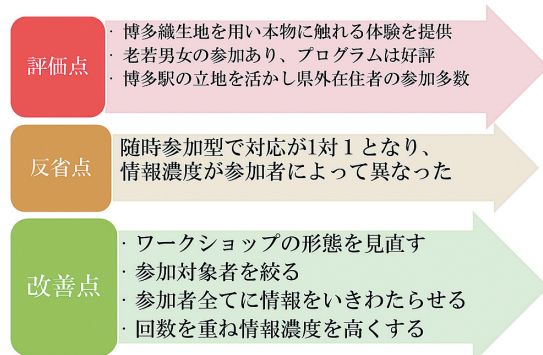


図2 2011年度ワークショップの検証

### 4 実施体制

2012年度のワークショップ・プログラムは、プロジェクト名を「ちびっこプロジェクト」と命

名し、美術学科1～3年次生の計13名が参加した。5月から授業時間外に毎週集まり、議論を重ね計画を練り上げた。この活動は課外活動であるため、プロジェクト運営には学生メンバーが自由に会議や作業に使える「場の提供」が必要である。今回はミーティング用にPC設備のあるゼミ教室、作業用に工房教室の使用を許可した。

彼らは今回のワークショップ内容を次のように設定した。

- ・博多織をテーマとし、代表的な柄である「献上柄」をワークモチーフとする。
- ・博多織の定義、歴史、意匠を教示する。
- ・本物の伝統的工芸品に触れる機会を作る。
- ・特色的なモチーフを用い、効果的に博多織を印象付ける成果物を製作する。

6月から会議と並行して具体的な準備作業にも取り掛かり、8月中にワークショップ各回の詳細なタイムテーブルを作成し、数回のリハーサルを施行した。ワークショップは9月から10月にかけて実施した。10月下旬の中間展示ではパネルにまとめ報告し、翌年2月の最終展示では商業施設でパネルと成果物が展示された。3月には次の年度へ向けた情報や活動の集約を行った(図3)。1年間の実施フェーズ中、最終的な到達点、目標を参加学生に提示することは重要である。特にワークショップ・プログラムの場合、ワークショップの実施が最終到達点ではない。その活動がどういう成果を得たかをまとめ、報告し、終了後の集約で活動を振り返り、次年度へ向けてプログラムを向上させていく必要がある。

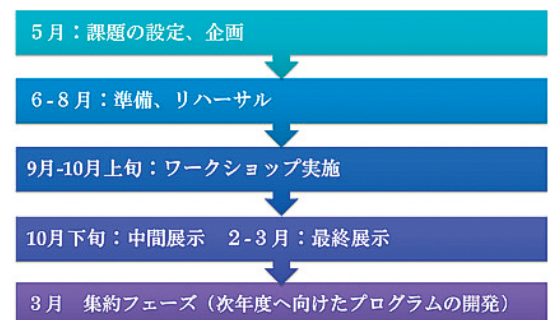


図3 ちびっこプロジェクト実施フェーズ

具体的には前年度の集約フェーズの検証より、2012年度のテーマを博多織に絞り、博多織に初めて触れる可能性が高い小学生を対象とすることなどが挙げられる。次世代の消費者となる子供たちに博多織のすばらしさや面白さをじっくり伝えたいと考え、知識と体験との両面から博多織を伝える2部門（レクチャー班・ワーク班）を1回にパッケージしたプログラムを設定できたのは、前年度の集約の成果である。

今回のワークショップは全3回の連続型とし、それぞれの回で、導入→レクチャー→ワーク→ふりかえりとフローで実施し、3回目で最終的なまとめを行う（図4）。学生メンバーはレクチャー班とワーク班に分かれ、染織専攻、日本画専攻などそれぞれの得意分野を活かし、自主的に事前準備を振り分けていった。プロジェクトリーダーとあらかじめ選出された各班長が常に調整をしながら情報共有をはかった。同時に、プロモーション全体で、毎月1回のリーダー会議及びプロジェクト参加学生全員による全体会議を開催し、進捗状況の確認、全体の意思疎通、情報共有をはかった。各回の記録は写真映像学科の学生メンバーに要請し、本論中に採用した画像の撮影を行ってもらっている。

#### ～ワークショップ案～

ワークショップの大きな内容は、福岡の工芸品の柄やマークなどを使ってスタンプを使い、子どもたちに押しってもらうというもの。ワークショップは3回ほど分けて開催しようと考えています。

#### 第1回ワークショップ案

①まず一番最初に、紙芝居などで子供たちにもわかりやすいように伝統柄や博多織等のレクチャーを行います。  
②その後、こちらが用意したバッグ（5種類の予定）に工芸品の柄やマークなどを使って作ったスタンプを子どもたちに押ししてもらいオリジナルのバッグを製作してもらいます。  
③出来上がったバッグは、お持ち帰り可能です。  
準備物についてですが、材料などは全てこちらで準備させていただきます。  
汚れても良い服やエプロン等だけ準備をしていただきたいと思います。



図5 企画書（一部）

ワークショップ開催場所、参加者の募集については、利便性や地域に根ざす活動という目的から本学立地学区にある香住丘学区の公民館館長・主事と連携を図り、参加児童の募集広報と場所の提供について協力を得た。学生メンバーは企画書を

作成し、実施に向けて公民館側と打ち合わせを重ねた（図5）。

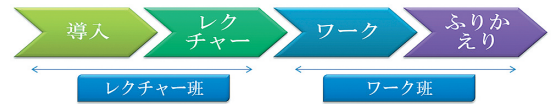


図4 ワークショップフロー

## 5 実施要領

「博多織ワークショップ」全3回

対象：小学生20名（定員）

場所：香住ヶ丘公民館（福岡市東区）

時間：各回2時間

実施日：第1回／2012年9月16日、第2回／9月23日、第3回／10月7日

第1回「博多織ってなに？」

献上柄のエコバックをつくろう！」

### ①自己紹介（導入）

学生メンバー、参加者の自己紹介。保護者に向け、これまでの「地域産業プロモーション」及び「博多織プロモーション」活動経緯を説明。

### ②博多織の歴史（レクチャー）

パワーポイントでの紙芝居。登場人物にアフレコ台詞をあて、博多織の定義、歴史をわかりやすく説明。

### ③献上柄の意味（レクチャー）

博多織の意匠について。献上柄（華皿・独鈷・親子縞・孝行縞）をパワーポイントで説明しながら帯に触れてもらう。五色献上の色と意味の説明。柄や色にもひとつひとつ意味があることを知ってもらうねらい。実物に触れながら絹素材の特徴である絹鳴や博多帯の締めやすさを体験（図6）。

### ④町にある博多織（レクチャー）

福岡市内の献上柄をモチーフにした建物、サイン、広告などを紹介。身近なところに博多織のモチーフが用いられていること、福岡・博多のイメージとして、博多織、特に献上柄が用いられていること、それだけ地域の人々に親しまれていることなどに気付かせる。



図6 献上柄の意味 (レクチャー)

## ⑤博多織クイズ (レクチャー)

②～④の内容から重要な個所を問題にした3択クイズを出題。博多織の知識を定着させる。

## ⑥エコバッグの作り方 (ワーク)

五色献上の色彩を、パステルカラーに置き換えた5色で地染めした綿製バッグを準備。献上柄の各柄に彫ったスタンプを組み合わせ、顔料にて文様を染め付けていく工程を説明。

## ⑦エコバッグ製作 (ワーク)

参加者をグループ分け。1グループに1名以上学生メンバーがつく。柄の意味や名称などを復習しながら製作を進める。スタンプを組み合わせることで柄が連続する美しさを感じてもらおう。顔料による染め付けという現代の染技法と、明るい色に置き換えた五色献上の色彩で再現された献上柄は親しみやすい印象を与え、伝統工芸の堅苦しいイメージを払拭するねらいも併せ持つ (図7)。



図7 エコバッグ制作 (ワーク)

## ⑧記念撮影 (ふりかえり)

エコバッグ完成後、記録用写真撮影。作者と製品を個別に、また集合した状態を記録する。制作したエコバッグは持ち帰り使用してもらおう。生活空間に献上柄を取り入れるねらい。

## 第2回「大きな生地に献上柄を染め付けよう！」

## ①復習：博多織の歴史 (導入)

## ②復習：献上柄の意味 (導入)

## ③着物のつくり (レクチャー)

実際に学生メンバーが着物を羽織った状態で、身頃・袖・衿・襟などのパーツを説明。着物のつくりを理解する。また絹地に触れ、帯地と着尺地の違いを体感。

## ④博多織クイズ (レクチャー)

①～③の内容から覚えてほしい個所をピックアップし出題。博多織の知識を定着させる。

## ⑤献上柄スタンプの使い方 (ワーク)

前回のスタンプと異なり、大きなスタンプを用いるため、取り扱い方を説明。

## ⑥大きな着物製作 (ワーク)

五色献上の色彩で地染めした5パーツのグループにわかれる。各パーツのサイズは、身頃1m×6m×2枚、袖1m×3m×2枚、襟衿1m×2m×1枚。学生が各グループにつき、アドバイスをしながら染め付け作業 (図8)。

## ⑦記念撮影 (ふりかえり)

完成後グループごとに撮影し、全体で集合写真を撮影。今回は持ち帰り作品がないため、製作



図8 大きな着物制作 (ワーク)

した布パーツと参加者を撮影し、プレゼント。染めつけた綿布は第3回までに学生メンバーが着物の形に縫製してくることを告知。

### 第3回「献上柄着物になったよ！思い出つくろう！」

#### ①きもの発表会（導入・レクチャー）

第2回で制作した布を仕立てた献上柄着物を発表。小さく畳み丸めた状態から、劇的に大きく広げていく。自分たちが担当したパーツがどの部分になっているかを、再度確認してもらう。

#### ②大きな着物披露（ふりかえり）

大きな着物を羽織ったり、中に入って遊んだり、袖を通したり、思い思いに遊び、着物に親しんでもらう。着物は回収するため、インスタントカメラにて参加者の記念撮影を行い、プレゼント（図9）。



図9 大きな着物披露（ふりかえり）

#### ③エコバッグに献上スタンプ製作（ワーク）

第1回で制作したエコバッグとは異なる色布を用いて、「人に贈る」エコバッグを製作。献上柄の意味を振り返り、誰に贈るかを念頭に置きながら柄を染め付けていく。

#### ④記念撮影（ふりかえり）・まとめ

ワークショップに参加してみたの感想、博多織に対する気持ちなどを参加者より発表してもらう。学生メンバーとのお別れの挨拶。記念撮影。

## 6 地域伝統産業振興としての成果

公民館で参加募集を行った際に、プログラム中に「学び」が入っている点、地域の大学が企画し

ているという信頼感から、保護者の反応は非常によかった。公民館を窓口とした募集は、保護者が興味をもち安心して子供を参加させるという流れが殆どで、兄弟での参加、保護者も含めた参加など、参加者に学ぼうという意欲が強くみられた。これは2011年度のイベント型ワークショップと異なる点で、募集型とイベント型に意識の差があると考えられる。

レクチャー部門で参加者が興味を示したのは、伝統的工芸品の帯や着物に触れる場面であった。触るのは初めてという参加者も数名みられ、アンケートに貴重な経験だったと書かれていた。絹地の着物のもつ心地よい手触り、同じ絹素材である博多織の帯の硬さや絹鳴りの音を体感してもらえたことは、今回の成果の一つである。博多織の歴史や柄の意味についても、実物を前に話す質問も出やすく、参加者の興味や理解が深まったと考えられる。

ワーク部門では、スタンプを選ぶ際に柄の名称や意味をしっかりと理解し製作する場面が見られた。回を重ねるごとに参加者同士や学生メンバーとのコミュニケーションが親密になり、忌憚なく意見交換をすることができた。参加者にはこのワークショップを出発点として、博多織に親近感を覚え、今後、新しい博多織ファンとして地域産業の振興に力を貸してもらいたいと考えている。本活動は新聞に取り上げられ、地域社会に向けてひろく情報発信ができた<sup>(注3)</sup>。

これらの成果を踏まえ、今年度の地域産業プロモーション全体のプロジェクト報告は、中間発表展示を2012年10月15日～21日、本学美術館オープンスペースで行った。開催日は本学のオープンキャンパスとも重なっていたことから、来場した多くの高校生や保護者、高校教員に向けて、博多織や本プロジェクトについての情報発信をポスターを用いて行うことができた。さらに2013年2月26日～3月4日、他のプロジェクトと共に福岡市の商業施設である天神イムズで最終発表展示を行った（図10）。会場にはワークショップの活動紹介パネルのほか、製作した献上柄着物の展示



図10 IMSでの展示

もなされた。この展示には公民館を通して、参加者を招待した。ここでも学生メンバーは、来場者への活動紹介を行い、情報発信に努めた。

## 7 教育プログラムとしての成果

これまで産学連携コラボレーションの実践的な活動によって参加学生に汎用的能力の向上がみられたことは報告してきた。今回のワークショップ・プログラムの企画実施においても汎用的能力の向上がみられ、教育プログラムとしての可能性を確信した<sup>(註4)</sup>。学生により個人差はあるが組織的活動を通して効果的に修得できたと推察している。これらは、彼らが課外活動のなかでメンバー同士の時間調整、プラン立案、企画、交渉、実施に向けての具体的準備、そして授業や課題との兼ね合いを考え、時間を管理してきたからこそ身についたスキルである。また参加小学生に向けて、どのように博多織をかみ砕いて説明するか、製作手順の確認など何度もミーティングとリハーサルを重ね、実施公民館と打ち合わせをし、真摯に取り組んだ結果であるといえる。5月のプロジェクト発足から参画学生は活動の中で自ら様々な課題に取り組み、同様の能力向上が図れたといえる。

学生メンバーより献上柄スタンプを活用したミニワークショップを実施したいとの提案があり、最終展示期間中の3月3日(日)に同商業施設で開催した。参加人数は3時間で82名であった。このときは随時募集型であったため、通りがかりの子供たちに声掛けし、あらかじめ作成した博多織の説明リーフレットを見せながら、はがきやカン

バッジを製作した(図11)。プロジェクトとして計画実施した3回のワークショップ・プログラムの終了が活動終了ではなく、その後についても彼らの自発的な提案が続いており、プロジェクトが進化している状態である。



図11 IMSでのミニワークショップ

## 8 考察

これまでの産学連携コラボレーション活動では、地域産業の期待する人材育成活動、今日的な感性による新しい商品開発活動、地域文化・産業への関心や認知度を高める情報発信活動を展開してきた。さらに今回のワークショップ・プログラムについても、商品開発等の他の産学連携コラボレーション活動と同様に、参加学生の汎用的能力の向上がみられた。同時に人材育成という側面から見ても、地域産業を深く学び、ワークショップ活動へと展開していく過程は、将来の地域産業従事者を育む教育プログラムとして有効であるといえる。

我々は今回の博多織をテーマとしたワークショップ・プランをひな形とし、他の地域産業をテーマとしたプログラムへと応用できるのではないかと考えている。このようなワークショップの

手法は、参加者が実際に「見る・聞く・触れる」という体験のなかで、伝統工芸や伝統産業を理解することに繋がる。また地域伝統産業を次世代へ繋げる、もしくはこれまであまり触れる機会がなかった人々へ紹介する体験型ソフトウェアとして有用である。このような活動は、大学の知的・人的資源を用いた地域伝統産業に対する情報発信と社会貢献の、新たな形であるともいえよう。

これからの地域伝統産業との産学連携プロジェクトには、商品開発やデザインなどのハードウェアと、今回のようなワークショップを含めた情報発信としてのソフトウェア、これら両面が求められるであろう（図12）。そしてその両面に対応できるのが大学であるともいえる。特に本学の芸術学部では、領域の異なる3学科それぞれが高度な専門性を有している。そのため、これらを横断的に活用し、ハード、ソフト両面より新しいコンテンツやプログラムを開発・提供していくことが可能である。私たちはこのワークショップ・プログラムのソフト面における可能性を探りながらプロジェクト型教育と地域伝統産業の振興・社会貢献を目的としたプログラムとして、今後も開発を進めていきたいと考えている。

既に2013年度はこのワークショップ・プログラムをひな形とし、久留米絣をテーマとして新たに構築したワークショップ・プログラムを企画実施中である。

## 注

- 1) 佐藤佳代・井上友子・星野浩司・佐藤慈・荒巻大樹・青木幹太：地域産業振興とその人材を目的にした芸術学部の総合的取組み、九州産業大学芸術学会研究報告、第43巻、2012  
佐藤佳代・井上友子・星野浩司・荒巻大樹・青木幹太：地域産業振興とその人材育成を目的とした取組みII、九州産業大学芸術学会研究報告、第44巻、2013
- 2) 2012年3月、「博多織プロモーション計画」芸術学部参画学生のうち、52名が回答。
- 3) 2012年9月17日付、西日本新聞、カラー掲載
- 4) ここでいう汎用的能力として取り上げられるのは、コミュニケーションやチームワークなどの人間関係形成能力、ストレスマネジメントや動機づけなどの自己管理能力、情報収集や分析処理などの課題対応能力、将来計画の実現や企業研究などのキャリアプランニング能力である。

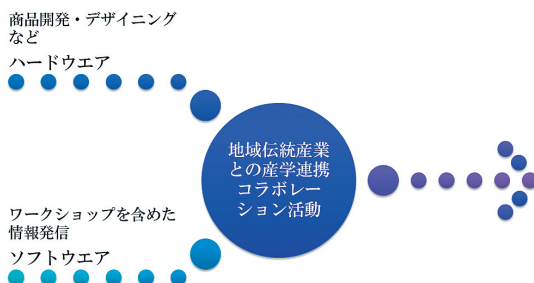


図12 これからの地域伝統産業との産学連携